

## 箱根の「けもの」

ひろたにひろこ  
広谷浩子 (学芸員)

### 箱根ってどんなところ？

哺乳類の生息環境としての箱根には、いくつかの際立った特徴があります。

① 神奈川県における有数の山岳地帯で、豊かな自然が残っていること

神奈川県は自然環境は、箱根と丹沢に代表される山地と、急速に開発が進む都市部とに2極化しています。箱根は野生生物に残された貴重な生息地の1つなのです。

② 箱根山が日本列島の動植物の分布を東西に分ける境界線となっていること

哺乳類では、アズマモグラとコウベモグラの分布境界の例が有名です。関東一帯に広く分布していたアズマモグラよりひと回り大きいコウベモグラが西から分布域を広げてきましたが、箱根山がバリアとなって分布拡大は止まっています。箱根山を境にした生物の分布は、哺乳類に限らずカエルなどでも見ることができます。

③ 観光地開発を経て再生された自然を含むということ

江戸時代より数々の温泉宿があった箱根では、20世紀初頭からリゾート開発が始まりました。戦後間もなくには、大手の鉄道会社・観光会社が争って交通機関、別荘地、ホテルなどの大規模開発を行った結果、いたるところに自動車道ができ、自然植生は植林地に変わりました。このような過程で、かつて生息していたニホンジカなど大型の哺乳類は姿を消したと考えられています。現在の箱根山には、大規模な開発後に再生した自然が多く含まれるのです。

### 箱根の動物たちの大きな変化

箱根のお膝元に当博物館がオープンし



図1 小田原市扇町付近の狩川を歩くニホンジカ。原田育生氏撮影。

てから14年目となりました。この間、箱根の哺乳類事情も大きく変化しています。

最も劇的な変化は、イノシシとニホンジカが多数生息するようになったことです。筆者は、第1回神奈川県レッドデータ生物調査報告書(1995)の中で、「ニホンジカ、イノシシは箱根には生息していない」と書きましたが、2008年現在、両種とも確実に生息し、数を増やしています。

もともと西日本を中心に生息しているイノシシは、1970年代までごく限られた地域に少数が生息するだけでした。しかし、1980年代には箱根町で給餌が行なわれるようになって数も増え、人家の近くに定住するようになりました。現在は害獣としてニホンザル以上の脅威を人々に与えています。博物館周辺の山でも、掘り返し跡やスタ場などがたくさん見つかっています。箱根町、湯河原町、小田原市などでは、毎年駆除が行なわれていますが、被害を抑制できていません。イノシシは、1回の出産で4～5頭の赤ん坊を産みます。子どもの成長は速く、2歳になるとメスは出産可能となります。子どもを産んだメスは、自分の母親から次第に離れて新たな生息域ができてきます。こうして、毎年確実に数を増やし、すみ場所も拡大させているのでしょう。

ニホンジカの出現は、イノシシよりかなり遅く、2000年前後と考えられています。箱根町との境にある塔ノ峰の稜線沿いで糞が発見されるようになり、箱根町山崎や小田原市入生田などでも人家近くまでニホンジカが来ているという情報があったのが2000年夏のことでした。その後も発見の情報が増え、昨年から市街地や西湘バイパス周辺などで小グループの目撃が頻繁に報告されるようになりました。これらの由来が丹沢か伊豆半島か、現在調査中です(図1)。

### 中型・小型の哺乳類は？

箱根というと、「お猿の駕籠や」のニホンザルを連想される方も多いでしょう(図2)。昔からニホンザルは箱根山中に細々と暮らし



図2 ニホンザルの母と子。頭本昭夫氏撮影。

ていましたが、1960年代から箱根町・湯河原町で行なわれた餌付けの結果、個体数が増え、群れの分裂も進んで、生息域を大幅に拡大させました。餌付けが中止になると、サルたちは人家や果樹園のある方向へと生息域をシフトさせて、悪名高き「箱根のニホンザル」が誕生しました。現在は、保護管理計画のもとでの徹底した追い上げと加害個体の選択的駆除により、個体数も減り被害も少なくなりつつあります。1990年代には、箱根のサルを山中に移す野猿の郷事業が行なわれましたが、頓挫しました。追われても追われても人里に留まろうとするニホンザルとにらめっこを続けるという今の方法こそ実効力があるのかもしれない。

中型の哺乳類としては他に食肉目のタヌキ、キツネ、アナグマ、テン、イタチやウサギ目のノウサギが生息します。外来生物のハクビシン、アライグマも生息が確認されています。最も目撃数が少ないのはキツネです。彼らが好む丘陵地や河川敷などが開発により少なくなったからなのでしょうか。このまま静かにいなくなってしまうのか、とても心配です。

小型の哺乳類としては、リス、ムササビやネズミなどのげっ歯目とコウモリの仲間の翼手目、モグラやジネズミなどの食虫目がいます。これらは、生息確認自体が難しく、博物館に運ばれるへい死体も少ないため、現段階では生息状況を把握できていません。たとえば、博物館周辺では、ムササビ、アカネズミ、ヒミズ、ジネズミの生息を確認していますが、リスは？他のネズミは？コウモリは何種？と尋ねられると、答えに窮してしまいます。積極的なサンプリングと情報収集が必要と、自戒をこめて記しておきたいと思います。